

## -\*視覚障がい者ランナーと伴走者の現状分析（その2）

### - 視覚障がい者ランナーの事故実態調査 -

鈴木邦雄

視覚障害 盲人 マラソン 伴走者 事故 怪我

#### ・目的

視覚障がい者ランナーは伴走者というボランティアランナーのサポートを受けて走る場合がほとんどであるが、ランナー自身が見えない（見えにくい）ため、走る時の安全は伴走者大きく左右されることになる。しかし伴走者への遠慮からか事故・怪我の実態はなかなか伝わってこない。

本調査は視覚障がい者ランナーの事故について調査し、その原因と事故を防ぐにはどうしたら良いかを調査し、少しでも視覚障がい者ランナーの事故を減らし、安全・快適に走ってもらいたいとの願いから行ったものである。

#### ・方法

##### 1) 対象者

全国の視覚障がい者ランナーおよび伴走者を対象にしたが、直接会える方、ホームページ、メーリングリストなどインターネットで連絡できる方などが主体になった。また私のホームページでの「伴走実態調査」から調査に協力していただいた方も多かった。

##### 2) 調査方法

直接対面念でお話を聞ける視覚障がい者の方、メールなどでアンケートに回答をいただける方などを中心にし、一致部地域には郵送でアンケートを返送していただくことをお願いした。

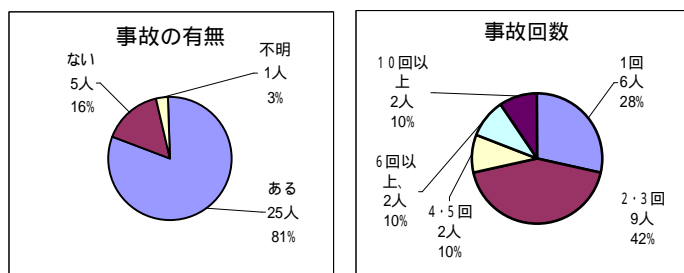
いずれの方法にしても、視覚障がい者ランナーに対しては伴走者が代筆していただくことを避け、ご家族などに限り代筆をお願いするように限定し、直接お会いした皆様には私が直接代筆する事であるべく伴走者の方への気遣いを排除することを心がけた。

#### ・結果

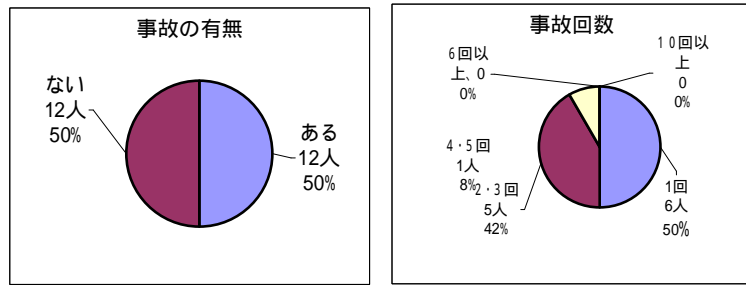
##### 1) 事故遭遇の有無・回数

事故に遭遇した経験の有無、およびその回数を視覚障がい者と伴走者別に集計した。

視覚障がい者

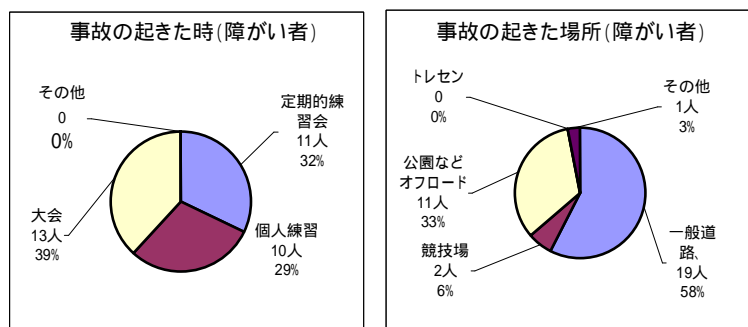


## 伴走者



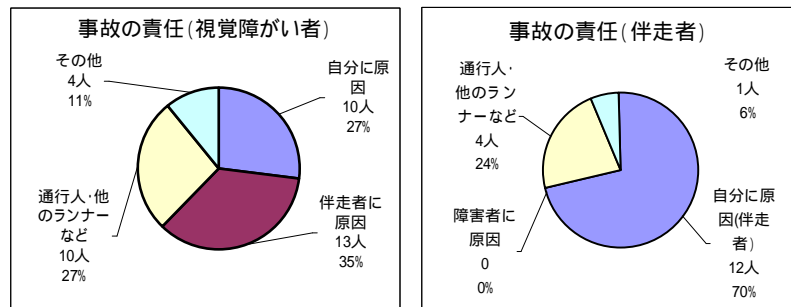
### 2) 事故の発生した時・場所

事故が発生した時とその場所を集計した(視覚障がい者ランナーのみ)(複数回答)



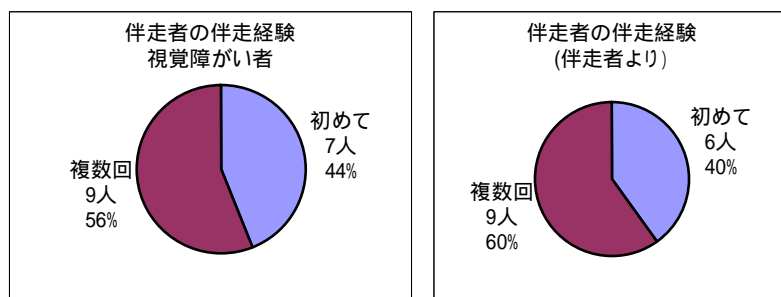
### 3) 事故の要因

事故を起こした要因(原因)が自分であるか、他の要因であるかを視覚障がい者ランナーと伴走者別に集計した(複数回答)



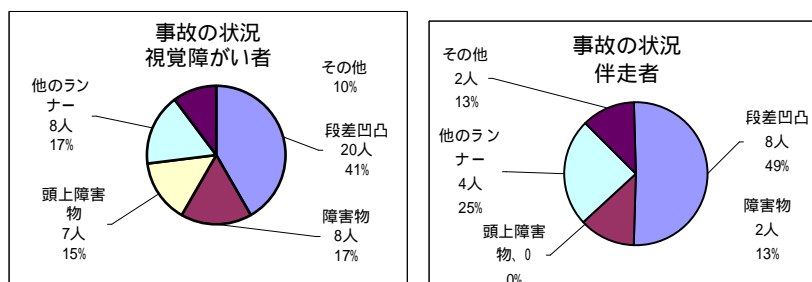
### 4) 事故時の伴走者の経験

事故を起こしたときの伴走者との伴走経験を集計した(複数回答)



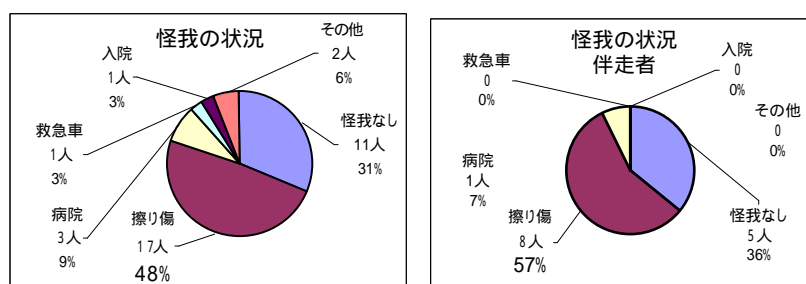
## 5) 事故の具体的状況

事故の具体的状況を視覚障がい者ランナー、伴走者の両方の立場から集計した（複数回答）



## 6) 怪我の状況

怪我の状況を視覚障がい者ランナー、伴走者の両方の立場から集計した（複数回答）



### ・考察

#### 1) 対象ランナーの現状

視覚障がい者ランナー32名、伴走者25名の計57名もの回答をいただき、北は茨城県かから南は沖縄県まで幅広く調査することができた。

#### 2) 事故遭遇の有無・回数

視覚障がい者ランナーの8割以上が事故を経験しており、その回数は1回から2・3回が全体の約7割を占めるが、今回のアンケートに反映できなかったランナーなどにも「怪我は数え切れない！」と言っているランナーもいて、視覚障がいランナーはそのハンディを乗り越えて走っていることが判った。

#### 3) 事故の発生した時、場所

視覚障がいランナーのみ集計したが、定期的な練習会、個人の練習、大会などほぼ同じ割合で事故に遭遇している。場所に関しては一般道路と公園などが全体の9割を超えているが、走る頻度と比例しているのではないかと想像する。

#### 4) 事故の要因

障害者ランナー、伴走者共に約25%が第三者の原因で事故を起こしたと述べているが、一方で伴走者は自分に責任があると70%の人が回答し、視覚障がい者に責任があると回答した人はいない。

一方で視覚障がい者ランナーは伴走者に責任があると約35%が回答しているが、一方では自分に責任があると回答しているランナーが27%いることは注目すべきことである。

## 5) 事故時の伴走経験

視覚障がい者ランナー、伴走者の両方の回答共に初めての伴走が約40%の事故を起こしている。しかし初めて当該ランナーと走った事と、初めて伴走したこととは繋がらず、詳細は今後調査を継続したい。

## 6) 事故の具体的状況

視覚障がい者、伴走者ともに「路面の凹凸・段差などで事故を起こした」が40%以上を占めている。一番基本的な走路の状況が伝わっていないようである。

## 7) 怪我の状況

視覚障がい者ランナー、伴走者ともに転倒しても怪我無しと言っている場合が30%以上であるが、一方では擦り傷などの怪我をした人が50%以上いる、また救急車を呼んだり、入院する必要があったランナーも15%いることも事実であり、重傷者では側溝に落ちて肋骨を複数本骨折したりしている人もいる。

### ・まとめ

- 1) 視覚障がい者ランナーの約8割が事故に遭遇しており重傷者もいる。一方伴走者は50%の人が事故を経験しているが、5回以上の事故経験があるとの回答がないことから、初心者時期に事故を起こしても、伴走回数が増え伴走技術向上と経験を重ねることで事故が減っていることが判る。
- 2) 事故の責任については伴走者が併走している場合にはよほどのアクシデント以外は伴走者の責任であると思う(私見)が、視覚障がい者ランナーの27%が自分の責任であると述べている。この事はたとえば伴走者にリードしてもらいながら走るとはいえ、自分のレースであるとの意識が高いのではないか。一方で伴走者は視覚障がい者ランナーの責任と言っている人は皆無であった。

### ・事故を減らすために

- 1) 10回以上の事故を経験している視覚障がい者ランナーが多数いる現状でも、伴走者は2・3回以上の事故を経験している人はほとんどいない、この事は伴走者の初期に適切な伴走教室などでの伴走者としての基本を学ぶことにより相当数の事故を減らすことが可能であると考えられる。
- 2) 事故に関しては「ハインリッヒの法則」(注)で1つの大事故の背景に29の軽微な事故がある、またその背後には300の異常事態が存在すると言われている。怪我なし・擦り傷程度済んだ事を「良かった！」で済ませるに事は問題がある、潜在的な事故の要因を根絶するのが大事故に繋がらない唯一の選択肢だと思う。
- 3) 万が一の事故に際して「ゴメンナサイ！」すまない事もあるだろう。ボランティア保険などに加入することで万が一の事故に対して誠意を示すことも出来、このような準備を怠らないボランティアはそれだけ充分な気配りがあり、その気配りこそが伴走という行為に一番求められていることである。

(注) ハインリッヒの法則：米国のハインリッヒ氏が労働災害の発生確率を分析したもので、保険会社の経営に役立てられている。